

龍と鯉・馬・牛・羊・鹿・犬の関係

李 国 棟

はじめに

本論の主旨は龍の起源の究明にある。もちろん、これは容易なことではなく、というのは、資料的にはもともと龍ではないものが龍と呼ばれる場合が多く、しかも、この情況は中国文化の「南北対立構造」とも密接にかかわっているからである。

これに鑑みて、本論では、まず龍と呼ばれるが実際は龍ではない物を排除し、それから、中国文化の「南北対立構造」を導入して、その中において龍の起源を究明することにした。

一、美称としての龍

東晋時代の歴史家干宝は怪異な伝説を集めて『搜神記』を著したが、その巻十四の第三四八番には、次のような話が記録されている。

晋の懷帝の永嘉年間に、韓媪と呼ばれる女が野原で巨大

な卵を見つけた。持ち帰って育てたところ、人間の赤ちゃんが生まれたので、擻児と呼ぶことにした。

この子が四歳になったばかりのころ、劉淵が平陽城を築こうとしたが、なかなか完成しないので、築城のじょうずな者を募集した。擻児はそれに応募し、蛇に姿を変えると、韓媪を助手にして、自分のはったあとに灰でしるしをつけさせ、

「灰の線どおりに城を築けば、すぐにできあがりますよ」と言ったが、けっきょくその言葉どおりに城は完成した。

ところが淵は怪しいやつと疑いをかけたので、蛇は山の洞穴に逃げ込んだ。ただ尾が二、三寸外に出ていたのを、淵の追手が斬りおすと、とつぜん洞穴のなかに泉が湧き出し、それがたまって池になった。そこでこの池を金竜池と呼ぶようになったのである。(竹田晃訳『東洋文庫・搜神記』平凡社、一九六四年一月初版)

擷児は蛇である。しかし、擷児の尻尾によってできた池は「金竜池」と呼ばれている。ここでは、「竜」が明らかに蛇の美称として用いられているわけだが、われわれは龍の起源を究明する場合、このような美称としての龍を排除しなければならないのである。

中国南方の人々、たとえば苗族や彝族の人々が崇拝している龍は、実質的には殆ど足のない蛇であり、この点をわれわれははっきりと認識しておく必要がある。しかしそれにしても、苗族や彝族の人々はなぜ蛇を龍と呼んでいるのであろうか？

私の考えでは、これは中国文化の「南北対立構造」によるものである。拙著『日中文化の源流——文学と神話からの分析——』（白帝社、一九九六年六月）では述べたが、中国には、もともと黄河流域の北方文化圏と長江流域の南方文化圏が存在している。北方文化圏は龍神文化であり、その支配者が黄帝である。南方文化圏は太陽神文化であり、その支配者が炎帝である。黄帝と炎帝が争った結果、黄帝がうち勝ったので、龍神文化が主に中国のオーソドックスな文化となった。したがって、人々は龍神文化という枠の中で自分たちの崇拝物を命名する際には、自然に美称として龍という漢字を用いたがっていた。言い換えれば、龍神文化がオーソドックスな文化になった以上、それに合うように崇拝物を命名するのが、命名行為の大前提となっていたのである。要するに、中国南方の人々が蛇を龍と呼ぶという

現象の背後には、北方の龍神文化の正統性への従順が感じられるのである。

二、龍と鯉

龍と蛇の関係は密切であるように見える。しかし第一節で述べたように、それはあくまでも形容詞的な美称関係にすぎない。龍に本質的な関係を持つ動物は、むしろ鯉、馬、羊、鹿の方だと私は考える。

龍と鯉の関係を論じた最古の文献は、宋代の陸佃が著した『埤雅』である。その巻二『釈魚』の龍の条には、このような論述がある。

龍、八十一鱗、九九の数を具え、九陽なり。鯉、三十六鱗、六六の数を具え、六陰なり。

『埤雅』では、龍と鯉は共に「魚」の部類に入れられているが、蛇は「虫」の部類に入れられている。現在、龍の原型は蛇だと一部の学者は考えているが、それは事実ではない。昔の中国人の考えでは、龍と蛇は同類でさえなかったのである。

龍は鯉と同類である。したがって、蛇よりも鯉の方が龍の起源にもっと本質的な関わりを持っていると考えた方が妥当である。龍が「九九の数を具え、九陽なり」という解釈は、重要なメッセージを伝えている。第一節で述べたとおり、中国の北方は龍神文化である。実際、この龍神文化の中では「九」が神聖

な数字と見なされ、「九」は直接龍につながっている。龍神文化の支配者は黄帝であり、彼の姿は「龍身而人頭」（『山海経・海内東経』）とされている。そして、この黄帝はのちに皇帝となつたわけなので、中国歴代の皇帝はみな「真龍天子」と自認し、漢代の初代皇帝・劉邦のように、直接龍に自分の誕生の一役を求めた皇帝さえ出たほどであった。昔、皇帝は九匹の龍の模様が刺繍してある「九龍袍」を着ていた。明・清兩代の皇帝の居城「紫禁城」には、九千九百九十九の部屋があり、城門の上には、縦九×横九の門鉾が打たれている。「紫禁城」には、また瑠璃瓦でできた「九龍壁」がある。これらはすべて龍神文化における龍と「九」の緊密な関係を示しているのである。

中国北方の龍神文化が「九」を神聖な数字と見なしているのに対して、中国南方の太陽神文化は「八」を神聖な数字と見なしている。これは、「八」を重んじる「八卦思想」が中国の南方に生まれたという事実を見るだけでも、太陽神文化における「八」の神聖性が理解できるであろう。そして、この「八」を神聖視する中国南方の太陽神文化は、そのまま日本の太陽神文化にもつながっており、日本の神話によく用いられた「八尋殿」「八千戈」「八尺鏡」「八咫鳥」などの言葉が、その証拠である。

このように確認してみると、龍が「九陽」と呼ばれていることは、まさに龍が中国北方文化の神髄であることを意味しているのである。

龍が「九陽」であるのに対して、鯉は「六陰」である。この性質上の陰陽相違が、前掲の『搜神記』にもはっきりと認められる。その巻七の第一八三番の話は、こうである。

太康五年正月、二匹の竜が宮中の武庫の井戸のなかに現われた。武庫とは、帝王の威儀を示す御物をたいせつにし、まっておく場所であり、建物も奥深く厳重で、竜などの住むはずがないところである。

その後七年たつて、地方の王がたがいに傷つけあった。二十八年後には、果して二人の異民族が天子の神器を盗んだが、二人とも字は竜であった。（前掲の竹田晃訳『東洋文庫・搜神記』）

また、第一八六番の話を見てみよう。

太康年間に、鯉が二匹、武庫の屋根の上に現われた。武庫は兵器の倉庫であり、魚には鱗があるから、やはり兵器のたぐいである。だいたい魚は陰気の極まったものであり、屋根の上は陽気のはなはだしきところであるから、魚が屋根の上に現れたのは、陰気の極致が戦争によって陽気を犯すことを意味している。

やがて恵帝のはじめになると、皇后の父楊駿を誅した際に、宮中の門の上を矢が飛び交う事態が起こり、皇后は庶人に降され、ひそかに毒を盛られて死んだ。

また、元康の末には賈后が政治の実権を握って、太子を誹謗して殺したあげく、やがてみずからも誅せられてしまった。(同前)

前の話では、龍は男の予兆であり、陽の極致を代表しているが、後の話では、鯉は女の予兆で、「陰気の極致」を代表している。鯉が二匹武庫の屋根に現れたため、皇后側の専権があり、相殺した事態になってしまったのだが、『搜神記』のこの記述は『埤雅』の記述と完全に合致しており、龍と鯉はずっと昔から、陽と陰の一对として考えられていたということが明らかになった。

龍と鯉は性質を異にしている。しかし、陰から陽への転換が全く不可能というわけではなく、鯉はある条件を満たせば、龍にも成れる。前掲の『埤雅』巻二『釈魚』の鯉の条では、その条件についてこう記されている。

俗説に、魚 龍門に躍りて過ぐれば龍と為り、唯鯉のみ或いは然り。亦其の寿千歳に至る者有り。(中略) 殆ど亦龍類なり。是を以て仙人 龍に乗り亦或いは鯉に騎り乃ち山湖を飛越するに至る。(同前)

これは「登龍門」の原型であるが、この話から明らかかなように、「龍門」を飛び越えるかどうか、鯉が龍になれるかどうかの条件である。龍は天上の物で陽の極致を代表し、鯉は水中の物で陰の極致を代表するのだが、しかし、鯉は昇天志向を持つ大魚であり、「龍門」を飛び越えれば、その時点で陽の龍に変わ

るのである。

『太平広記』巻四百六十六所引の『三秦記・龍門』によると、

龍門山は河東の界に在り。禹 山を鑿ち門を断ち、濶うこと一里余。黄河 中より流下し、兩岸車馬を通さず。毎ねに暮春の際に、黄鯉魚逆流して上ること有り、得し者は便ち化して龍と為る。又た林登に云う、龍門の下、毎歳の季春に黄鯉魚有り、海及び諸川より争いて来たりて之に赴く。一歳の中、龍門に登りし者は、七十二に過ぎず。初めて龍門に登れば、即ち雲雨有りて之に随う。天火 後より其の尾を焼きて、乃ち化して龍と為る。其の龍門は水浚箭湧、下流七里、深きこと三里、と。

という。また、清代の張英撰『淵鑑類函』巻四百三十七『鱗介部一・龍一』にも、似た記録が収められている。

辛氏三秦記に曰く、河津は一名龍門、大魚龍門の下に集まりて数千なるも上るを得ず。上りし者は龍と為り、上らざる者は魚と為る。故に暴頭龍門と云う。(原注に、大鯉魚龍門に登りて化して龍と為り、登らざる者は額を点じ頤を暴すと)

『太平広記』の話と『淵鑑類函』の話はみな散逸した『三秦記』によると記されている。内容の細部は多少異なるが、鯉が龍門に登れば龍になるという本筋は全く同じである。話の舞台となった龍門は「河東の界」にあるというが、この「河東の界」は

すなわち黄河中流域の河東郡を指し、現在の山西省河津県の近くにある。つまり、「登龍門」は、中国北方の龍神文化の中に生まれた話で、鯉が龍門を飛び越えて龍に変身するということは、龍の起源が中国北方の黄河流域と密接にかかわっていることを物語っているのである。

もちろん、中国北方の龍神文化が南下するにつれて、「登龍門」の話は南方にも広がり、現在のベトナムの首都・ハノイの近くの交趾郡封谿県にも「登龍門」の話が伝わっていたことが、『淵鑑類函』巻四百三十七『鱗介部一・龍一』所引の唐代以前の『交州記』によって確認されている。

要するに、龍は陽の極致を代表する天上の存在であり、鯉は陰の極致を代表する水中の存在である。全く正反対な関係にあるが、しかし、鯉は昇天志向を持ち、龍にもなれる。龍と鯉はすなわち中国北方の龍神文化の中でつながっているのである。

三、龍と馬と牛

龍と馬の関係は、「龍馬」という熟語が生まれるほど緊密である。『玉函山房輯佚書』所引の、梁代の孫柔之が著した『瑞応図』では、龍馬が次のように描かれている。

龍馬は、仁馬なり、河水の精なり。高さこと八尺五寸、長頸、身に鱗甲あり、略に翼あり、旁に垂毛あり。鳴声九音にして水を踏むも没せず。

龍馬は地上の家畜ではなく、水中の神である。高さが八尺五寸もあり、頸がとくに長い。実際、この長い頸がそのまま龍の長い頸になったのではないかと考えられる。龍馬の身体には鱗甲があり、この鱗甲は第二節で述べた龍と鯉の関係からも明らかのように、鯉から借りたものである。龍馬の身体には翼があり、これはまちがいに龍馬の昇天志向を示している。鯉の昇天志向はその「登龍門」の行為によって示されるが、龍馬の昇天志向はその翼によって示される。つまり、鯉と龍馬はともに水中のものでありながら、天上界へと目指しているのである。龍馬の鳴き声が「九音」とされているが、この「九音」の「九」は中国北方の龍神文化に特有の神聖な数字であり、龍馬が龍神文化の産物であることを物語っているのである。

『太平広記』巻四百三十五にも、龍馬の話が数多く収められている。次のような話を読んでみよう。

唐の高宗の武徳五年、景谷県の西水に現れた龍馬は、身長八、九尺、龍の形にして鱗甲あり。龍身馬首、頂には二角あり。白色。口に一物を銜えて、長きこと三、四尺あるべし。波を凌ぎて廻顧し、百余歩にして没す。

この引用でとくに注意しておきたいのは、龍馬の頭に二本の角が生えているということである。この二本の角はのちに龍の角となるわけだが、この二本の角はそもそもどこから借りてきたのだろうか？ 私の考えでは、この二本の角は後述する羊と

鹿から借りてきたものである。

龍馬の話は唐代の玄奘撰『大唐西域記』巻一にも記載されており、それを基本材料にした明代の小説『西遊記』第十五回でも、龍が三蔵法師の馬に変身している。要するに、龍と馬の間には明確な変身関係があり、龍馬の多くの特徴がそのまま龍の基本的な特徴となっているのである。龍の起源について、大蛇説、ワニ説、トカゲ説、恐竜説、魚説、馬説、豚説、鳥説、竜巻説、虹説、黄河説などいろいろな説が出されているが、私は馬説を支持する。念を押すまでもなく、龍の原型となった馬は普通の馬ではなく、高くて頸の長い大きな馬にちがいない。そして、龍馬伝説が中国の北部に集中しているという傾向からも察せられるように、これほど大きな馬が中国の北部に実在していた。このような大きな馬が中軸となり、北方の羊、鹿、鯉の



图一 5000年前的玉龙
(内蒙古自治区翁牛特旗三星他拉村出土)

諸要素を取り入れて「龍馬」に「成長」し、そしてこのような「龍馬」から原始的な龍が誕生したのだ、と私は考える。

一九七一年、内蒙古自治区翁牛特旗三星他拉村で五千年前の玉馬龍（写真参照）が発掘された。

この玉龍については、豚龍だと主張する人がいるが、『龍鳳文化源流』（北京工芸美術出版社、一九八八年一月）の著者・王大有氏や『中国龍の新発見』（北京大学二〇〇〇年一月）の著者・王東氏など、多くの学者はそれを馬龍と見ている。私もそれは馬龍だと考える。この玉馬龍には重大な意義があり、今日の龍が馬の頭を持つているのは、今日の龍が原型的には五千年前のこの玉馬龍に直結していることを物語っているのである。

日本の学者石田英一郎氏はその著作『新版河童駒引考』（岩波文庫、一九九四年五月）の第二章で、馬と牛の対比関係において馬と龍の関係を論じている。

前二章にのべてきた中国における水神と牛馬との関係につき、もしきわめて大ざっぱな概観がゆるされるならば、水馬に関する思想が、主として中国西部ないし西北部よりいわゆる西域にかけてつらなっているのに対して、河牛のそれは、むしろ南部または西南部より東南アジア半島にむかって分布していることを見出すのである。しかも両者ともに水神たる龍と密接に結合しているとはいえ、馬と結んだ龍は『漢書』にみる西極天馬の歌にもうかがわれるように、水霊たるとともにまた天界神の地位にのぼりうる本来の「龍」であり、これに反し、牛と結んだそれは、どちらかといえばもともと河中または土中にひそんで昇天の資格なき「蛟」の族類であった。このことは『易経』にいわゆる「乾を馬と為

し、坤を牛と為す」(説卦伝) というこの国古来の根本思想からも、容易に理解しうるところであるが、筆者はさらに一步をすすめて、龍馬―天馬の觀念は、むしろ黄河の流域に国家的支配を樹立した、「北方」系統の種族または階級によって、多く文献のうえにつたえられ、のち徐々に民間の信仰にも沈下したのに対して、牛崇拜にもとづく河牛―土牛の觀念は、もともと華南華中寄りの農民大衆の祭と俗信の中にきざして、一面ながく常民の信仰のうちに保持せられるとともに、他面はやくから王侯士大夫の祭祀の中にもとりいれられるようになったのではないかという予想をいだく。

この南と北、土と天、牛と馬との二元的対立は、今日の漢民族そのものの歴史的・文化的構成過程を説明するひとつの鍵となるものであって、儒教にみる天の思想にまで発展した北方的な上天信仰と、道教にもられた南方的な土の宗教、ないしは鄒魯の教学と荆楚の哲理とのあいだにも、またこれに似た関係がみとめられないであろうか。(傍線引用者)

石田英一郎氏は中国における「南と北、土と天、牛と馬との二元的対立」を指摘しているが、これは私の「南北対立構造」説に限りなく近い。龍の起源を検討するには、やはり中国文化のこの「南北対立構造」を認識しておかなければならないのである。

儒教は中国北方の思想であり、道教または老莊思想は中国南

方の思想である。儒教は「仁者は山を楽しむ」(『論語』)と主張し、静本位の思想であるが、道教は「上善は水の如し」(『老子』)と主張し、動本位の思想である。つまり、儒教と道教はちょうど正反対な対立関係にあるが、馬と牛の関係もそうである。前掲の『淵鑑類函』巻四百三十五『獸部七・牛一』には、

広雅に曰く、牛は陰物なり、故に起つには後足を先んじ、臥すには前足を先んず。(中略)造化権輿に曰く、乾を馬と為し、坤を牛と為す。乾は陽なり、故に馬蹄は圓し。坤は陰なり、故に牛蹄は圻く。陽病めば則ち陰勝ち、故に馬は疾めば則ち臥す。陰病めば則ち陽勝ち、故に牛は疾めば則ち立つ。

とあり、馬は陽に属し、牛は陰に属するという考え方が中国では極めて一般的な考え方であるということが明らかである。龍が「九陽」であることを第二節で述べたが、この点と結びつけて考えてみると、馬は龍につながっており、牛は龍と対立しているということが分かる。

中国の南方では、牛が龍を退治する話が広く伝わっている。

李氷 蜀郡の守と為る。蛟有り歳に暴して、漂墊相望む。氷乃ち水に入りて蛟を戮す。己 牛の形と為り、江神龍躍して、氷勝たず。出づるに及びて、卒の勇者数百を選びて、彊弓大箭を持たしむ。約して曰く、吾 前者は牛と為り、今は江神も必ず亦牛と為らん。我 太白練を以て自束して

以て辨す。汝 当に其の記無き者を殺すべしと。遂に吼呼して入る。須臾にして雷風大いに起こりて、天地一色なり。稍や定まりて、二牛の上に闘う有り。公の練甚だ長白、武士 乃ち其の神を斉射して、遂に斃る。此より蜀の人 復び水の病む所と為らず。今に至りて大浪衝濤して、公の祠に及ばんと欲すれば、皆瀾々として去る。故に春冬に闘牛の戲を設有するは、未だ必ずしも此に由らずんばあらざるなり。

これは、『太平広記』卷二百九十一所引の『成都記』に収められた有名な話であるが、李氷が牛に変身して水害を起こす蛟龍を退治した所に、この話の眼目がある。

牛は農業の守護神であり、中国南方の支配神・炎帝も「人身牛首」(『太平御覧』卷七十八所引の『帝王世紀』)とされている。つまり、中国南方の神様は、まず農業を守る牛的存在だと要求される。そして、農業にとっては、洪水が最大の災害なので、農業の守護神である牛はまた洪水を起こした元凶の悪龍を退治する任務を与えられるわけである。このように確認してみると、李氷が洪水を治める際にまず牛に変身するということの文化的意義がはっきりと理解でき、悪龍退治という牛の南方的性格がいつそう鮮明になるのである。もちろん、李氷が蛟龍退治のために牛に変身する時には、蛟龍も牛に変身した。しかし、「吾 前者は牛と為り、今は江神も必ず亦牛と為らん」とい

う李氷の言葉からも分かるように、蛟龍の牛への変身は単に李氷の牛への変身に対する随順にすぎず、蛟龍と牛の間に、文化的な必然性はなかった。要するに、牛は南方の神的存在で、牛と対立した龍は北方の神的存在だと見てよいわけである。これまで、龍は大蛇やワニを基礎にして中国の南方に生まれたという説が出されているが、しかし、龍と牛のこの文化上の南北対立関係から判断すれば、この説が成立しがたいと言わざるを得ない。

昔から、蛇は千年を経れば龍に変わるとい説があり、梁代の任昉撰『述異記』にも、「水虺 五百年にして化して蛟と為る。蛟 千年にして化して龍と為る。龍 五百年にして角龍と為り、千年にして応龍と為る」と書かれている。しかし、『述異記』のこの記述をよく読めば分かるように、この中では、蛇の変化とともに蛇の昇天志向も強調されている。つまり、蛇から龍に変化することは、本質的にいえば、地上から天上へと上昇することを意味しているのである。

龍と蛇の根本的な違いは二つあると思う。一つは、龍には足があるが蛇にはそれがなく、もう一つは、龍には昇天志向があるが蛇にはそれがなく、この昇天志向があるという角度から見れば、『埤雅』卷十の『積虫』に取り上げられた「蝮蛇」は「風化して能く雲霧を興して其の中を遊ぶ」特別な蛇で、それは蛇の例外として本当に龍に近く、また鯉と龍馬に共通し

ている。しかし、普通の蛇はどちらかといえば牛と同様で、昇天志向のない、大地に根ざす存在なのである。

昇天志向があるかどうかという点では、龍と蛇は大いに異なっているが、実際、龍と蛇の両漢字にも、この点が認められる。「りゅう」を表す漢字には二通りの書き方があり、一つは「龍」であり、もう一つは「竜」である。二字は書き方が違うけれども、上の部分には、ともに「立」がある。唐代の段成式が著した『酉陽雜俎』巻十七によると、この「立」は「尺木」という。

龍の頭上に一物有り、博山の形の如く、尺木と名づく。龍は尺木無くして、昇天する能わず。

つまり、「尺木」が龍が昇天できるどうかにかかわっており、もし龍という漢字から「立」を取ってしまえば、龍は昇天できなくなり、すなわち龍は龍でなくなるのである。

龍と比較してみると、蛇という漢字には、「立」に当たる部分がない。その代わりに、「虫」へんがついている。「虫」へんは大地を這う物の意味であり、この点では、日本語も共通している。「蝮」という蛇は日本語では「まむし」という。「ま」が「真」を意味するので、日本人は「まむし」を「真の虫」と認識しているということが分かる。要するに、蛇が大地を這う「虫」であるのに対して、龍は天上を飛行する「馬」なのである。

四、龍と羊

広島大学教授富永一登氏のご教示により、筆者は三国時代の呉の康僧会訳『旧雜譬喻経』に龍と羊の変身関係を示す資料を見つけた。龍王は、自分の娘を救った国王に感謝するために羊に化し、婦女によって身を滅す愚を彼に説く話とその巻二十一に載っている。この話は、羊が龍の化身となる時期の比較的早い史料として、非常に重要である。

唐代の伝奇小説『柳毅伝』は、科挙試験に落第した書生・柳毅が困っている龍女を助けたため、最終的に龍女と結婚して億万長者になる物語であるが、この物語は実際、龍と羊の関係をよく示している。虐められた龍女が羊を放牧していたところ、柳毅は彼女に出会って、龍宮へ手紙を届けに行くと言ったが、そのすぐ後に、柳毅は龍女の行動を不思議に思い、こう聞いた。

「あなたが羊を飼っておられるのは、いったいなんにするためですか。神さまが殺して召しあがるのですか」

とたずねると、女は答えた。

「羊ではありません。雨を降らせる神ですわ」

「雨を降らせる神とはどんなものですか」

「雷獣の仲間です」

毅がふりかえって見ると、みな目を光らせ、力強い足ど

りをしていて、水を飲み草を食べるようすも羊とはずいぶん違っている。だが、大きさや毛なみ、角などは、羊と変わりがなかった。(前野直彬訳『中国古典文学大系 六朝・唐・宋小説選』平凡社、一九六八年七月初版)

龍女が飼っている羊は実際羊ではなく、「雷獣の仲間」、つまり雷神の一人である。羊は雷神である以上、天上の存在と見てよいわけだが、実は、中国北方の龍神文化の支配者・黄帝も雷神である。黄帝が龍そのものであるから、黄帝と同じ雷神の資格を持つ羊は当然龍と本質的な接点を持つているのである。

今日、羊が天上の雷神にかかわっているといえ、多くの人は不思議に思うかもしれない。しかし、東晋の『搜神記』巻一の第八番の話には、仙人が木彫りの羊に跨って昇天したことが歴史的な筆致で描かれているし、また「羊」が入っている漢字について考えてみても、その傾向が認められる。

「養」、「善」、「義」、「美」、この四つの漢字はいずれも上に「羊」がある。すなわち、この四つの漢字はいずれも天上の雷神と密接にかかわっているのである。『説文解字』によると、「養は供養なり」という。中国北方の龍神文化圏では、もともと騎馬民族の習慣が濃厚に浸透している漢民族が生活していた。彼らにとって、羊は一番身近で、しかも一番美味しい食べ物であった。したがって、羊を食べるのは、体の保養になっていた。そして、天上の雷神に願をかける時、自分たちにとって一番美

味しい羊を犠牲として捧げていた。『説文解字』の指摘した「供養」という原義は、つまりこのように生まれたのであろう。

「善」はもともと二通りの書き方があり、一つは「譚」であり、もう一つは「善」である。「譚」は「羊」と「言」に分けられる。二人の人が言い争っていて、しかもどちらが正しいか分からない場合、犠牲として羊を一頭天上の神様に捧げる。すると、天上の雷神が天上から公平に審判を下さる。これが「譚」の原義である。もう一つの「善」だが、この字の上は羊であるが、その下は何であるか、きちんとした説明はまだない。私個人の考えでは、その下は「台」の変形であろう。すなわち、「台」の上に「羊」を載せるという象形である。言うまでもなく、この「台」は神前の犠牲を載せる台であるので、天上の神様に犠牲として羊を捧げるのが、「善」の原義なのである。

「義」は「羊」と「我」から成る。『説文解字』では、「義」の原義は「己の威儀」と解釈されているが、しかし、「羊」と「我」が一緒になると、なぜ「己の威儀」となるのかについては、人々の意見は統一されていない。『大漢語林』(大修館書店、一九九二年四月)の著者・鎌田正氏、米山寅太郎氏と、『字通』(平凡社、一九九六年十月)の著者・白川静氏は「殺性様子説」を提出しているが、『角川大辞源』(角川書店、一九九二年二月)の著者・尾崎雄二郎、都田春男、西岡弘、山田勝美、山田俊夫の五氏は「舞踊行礼説」を提出している。そして、私は私なりの

説を持つている。「我」は戈を手に持つ己の意味で、「羊」が「戈」の上にあるので、「義」は、天上の雷神に向かって犠牲である羊を高く突き上げて己の姿と理解することができよう。『説文解字』の指摘した「己の威儀」という原義は、まさにこの象形から生まれたのであろう。もちろん、「己の威儀」は単なる形式美ではなく、それ相応の意味がある。犠牲としての羊を高く突き上げているのは、雷神に宣誓をしている様子であり、絶対に約束を守るぞといったような神様との約束意識が「義」の中核となっていたはずである。

「美」は「羊」と「大」から成る。『説文解字』は「美は甘なり」と指摘し、「美」の原義は「美味」と解釈しているが、実は、大きな肥えた羊は形態的にも非常に美しく、「美味」と「壮美」の両方の意味を、「美」は原義として含んでいるのではないかと考えられる。また、「羊」が「美」の上の部分に入れられているという所を見ても分かるように、この「羊」も実際天上の雷神に犠牲として捧げるものなのである。

このように確認してみると、羊は、中国北方の漢民族の一番の好物であると同時に、天上の雷神への最高の犠牲でもある。したがって、羊はしだいに雷神の仲間であるという文化的コードを持つようになったのであった。

「龍馬」ほどポピュラーではないが、実は、「龍羊」という熟語もある。宋代の宋祁が著した『益部方物略記』は、「龍羊」と

いう種類の羊をあげ、その特徴として「羊質にして大角首に於いて縹」と指摘している。私は映画や写真でこの「龍羊」を見たことがある。非常に大きな羊で、頭の両側に丸く曲がついている大きな角と、腹の両側に垂れている長い毛が印象的であったが、実際、腹の両側に長い毛が垂れているという特徴は、「龍馬」の一特徴ともなっている。「旁に垂毛があり」がそれである。この点から見れば、羊、とりわけ「龍羊」は「龍馬」というイメージの形成を通して、龍の形成に影響を与えているのである。

要するに、馬と同様、羊も龍と本質的な関連を持っている。馬と羊はいずれも北方の家畜なので、それらと龍の本質的な関係は、龍の北方的出自を物語っているのではないかと考えられる。

五、龍と鹿

『淵鑑類函』巻四百三十『獸部二・鹿一』には、次のような記述がある。

本草集解に曰く、鹿は馬身羊尾、頭側みて長く、高脚にして行くこと速し。牡は角有り、夏至れば則ち解く。大なること子馬の如く、黄質白斑、俗に馬鹿と称す。

昔の中国人から見れば、ある種類の鹿は「馬身羊尾」で、馬と羊の結合体である。この種類の鹿は「馬鹿」と言い、子馬のようで角がある。実際、この「馬鹿」は、龍の起源を考える上

でとくに注意すべきである。定型化した龍を見れば、龍の角が鹿から借りてきたものであるということが明らかである。しかしかといって、鹿は最初から龍と緊密な関係を持つているわけではない。「馬身羊尾」や「馬鹿」という表現から推察すれば、鹿が龍と緊密な関係を持ったのは、馬と羊を媒介としているからである。繰り返しになるが、龍の原型は馬である。「馬鹿」は馬に似ているから、まず馬に同類の関係を持つことができた。一方、「馬鹿」は羊にも共通点があるので、羊にまた同類の関係を持つようになった。このようにして見れば、龍の角は最初のうちは羊の角であった可能性が非常に高い。現に古代の龍文献を見ても、その角が羊の角に似ているのが相当見つかる。しかしその後、「馬鹿」が馬と羊の同類仲間となると、龍の角はまた自然に、より格好のよい鹿の角にすり替わったのであろう。「馬鹿」もまた北方の動物である。「馬鹿」と龍の本質的な関係から判断すれば、龍はやはり中国の北方に誕生したのだ、と思いうわけである。

六、龍と犬

犬も龍と関係を持っており、「龍犬」が文献的にも相当確認できる。『搜神記』巻十四の第三四三番の話が、その一例である。

昔徐国の後宮にいた婦人が懐妊して卵を生んだが、縁起でもないと思って、河原に捨てた。ところが、鵠蒼という

名の犬がその卵をくわえて帰って来た。やがて子供が産まれ、その子はのちに徐国の後継ぎになったのであった。

その後、鵠蒼は死ぬ直前に角が生え、九本の尾を生じた。実は黄龍だったのである。そこで徐国の領内に葬った。いまでもそこには犬塚が残っている。(前掲の竹田晃訳『東洋文庫・搜神記』)

『搜神記』巻二十の第四五七番の話にも、『搜神後記』巻九の第一〇〇番の話にも、龍犬が登場している。

呉の孫権の時代に、李純信という人があった。襄陽郡紀南県(湖北省)人である。家に黒竜という犬を飼っていたが、：(同前)

会稽郡句章県(浙江省)庶民で張然という者が、賦役に駆り出されて都へ行ったまま、数年間家に帰ることができなかった。(中略)張然は都で一匹の犬を飼っていたが、非常に敏捷な犬で、烏龍と名づけ、いつも共に連れていた。：(前野直彬訳『中国古典文学大系 六朝・唐・宋小説選』平凡社、一九六八年七月初版)

以上の引用は、犬と龍の間の密接な関係をはつきりと示しているのである。

今日のわれわれにとっては、犬と龍の接点がどこにあるか想像しにくい、しかし、古代の中国人にとっては、犬と龍の間

にははっきりした接点があり、それらの関係は、鹿と龍の関係に似ているのであった。

天狗という名の星がある。『史記・天官書』によれば、「天狗は、状、大奔星の如くにして、声有り。其の下りて地に止まるときは、狗に類たり」という。つまり、まず天狗という星によって、犬と天の関係が出来上がったのである。

天狗は星の名前であると同時に、また怪獣の名前である。『山海経・西山経』によれば、天狗は「狸に似て、頭が白い」という。『史記』の「其の下りて地に止まるときは、狗に類たり」という記述は天狗の怪獣性を示唆しているが、『山海経』の記述と結びつけて考えれば、天狗はむしろもともと地上の狸に似た特別な白犬（あるいは頭部だけが白い犬）を指しており、のちになつてこの特別な天狗にもとづいて天上のある星を命名したということが、論理的に推察できるのである。

白犬といえば、天馬のことも思い出される。『山海経・北山経』によれば、天馬は「白犬に似て頭が黒く、人を見れば飛び去る」という。天狗は白犬である。天馬も白犬に似ている。だから、天狗は形態的には天馬に似ていると判断してよく、犬と馬はこのようにして天上界にかかわるものとして密接な関係を結ぶことができたのである。

第三節で述べなかつたが、実際、天馬は龍馬の別名でもあり、龍馬の中には、確かに白馬が比較的多い。第二節では、『太平広

記』卷四百三十五所引の、白色の龍馬の話を引用したが、実は、その話のすぐ後には、もう一つの話が収められている。

西陵の北、陸行すること三十里、石穴有り馬穴と名づく。常に白馬此の穴より出づること有り。人之を逐えば、潜行して漢中より出づ。漢中の人馬を失えば、亦此の穴を出ず。相去ること数千里。今 馬穴山は峽州夷陵に在り。

この話に登場した白馬は、「龍馬」とは書かれていない。しかし、馬穴が山中の溪流と一体となっているのが常識なので、この話の隠文脈としては、この白馬は水中の霊物であるという性格を与えられている。そして、この水中の霊物という性格は、まさに龍馬の最も顕著な性格である。したがって、この話の中の白馬も龍馬と考えてよいと思われる。

『西遊記』の三蔵法師が乗っている馬は龍が変化したものであるということをも第二節では指摘したが、ここでとくに強調したいのは、その馬も白馬、という設定である。

要するに、龍馬はよく白馬と考えられており、白犬の天狗はこの点で龍馬に相通じている。犬はまさに天狗と龍馬の類似を通して、馬、それから更に龍との関係を築き上げたのである。

もちろん、犬に龍との関係を築き上げた媒介は、馬だけではない。羊も重要な役割を果たしている。『搜神記』卷四の第八八番の話を読んでみよう。

漢の宣帝の時、南陽（河南省）の陰子方は、生まれつき

大そう親孝行で、善行を重ね、好んで施しものをしていた。彼はまた、竈の神をまつることが好きだったが、ある年の竈祭りの日のこと、朝炊事をしていると、竈の神が姿を現わした。子方は再拜してこの福をありがたく迎え、家に飼っていた黄色い羊をつぶして神に捧げた。このことがあってから、子方はあつという間に莫大な財産を築き、七百頃以上の田、車や馬、それに奴隷の数も、地方の長官と肩をならべるほどになったのである。(前掲の竹田晃訳『東洋文庫・搜神記』)

ここには、「黄色い羊」が登場している。しかし、この「黄色い羊」は羊ではない。中華書局が一九七九年九月に出版した『搜神記』の該当個所の注によると、『荊楚歲時記』には「黄犬を以て之を祭り、之を黄羊と謂う」という言葉があり、『古今注』には、「狗は一名黄羊」という言葉がある、という。つまり、「黄色い羊」は実際黄色い羊ではなく、黄色い犬なのである。ついでにいうと、犬の色はいろいろあるが、なぜその中から黄色い犬を選んだかという点、黄色い犬の肉が一番美味しいからである。明代李時珍の『本草綱目』が言うところの「黄犬を上と為し、黒犬、白犬は之に次ぐ」が、その証拠である。

第四節で述べたが、黄河流域の中国人はよく犠牲として羊を天上の雷神に捧げていた。そして、羊がない場合、その代替物として身近な黄色い犬を使っていたのであろう。しかし、黄色

い犬は正式の犠牲用家畜ではなく、正式の犠牲用家畜は羊と牛と豚であった。こうなると、たとえ黄色い犬を犠牲に使っていても、犬という名を使わず、正式の名を使う必要が生じ、そこで「黄羊」という犬を美化する名が現れたのである。つまり、蛇が龍という美称を持つているように、黄色い犬は「黄羊」という美称を持つているのである。

要するに、犬は龍馬と羊を媒介として龍と密接にかかわるようになったのである。

『搜神記』、『搜神後記』の説話を見ても分かるが、龍犬の話はどちらかといえば南方に多い。これはいったいどういうわけだろうか？

犬はもともと中国南方の神的存在であり、今日でも、瑤族など昔は「蛮夷」と呼ばれた少数民族の間で犬崇拜が続いている。『後漢書・南蛮西南夷列伝』には、このような話が載っている。

昔 高辛氏に犬戎の寇有り。帝 其の侵暴せることを患いて、征伐するも剋たず。乃ち天下を訪募し、能く犬戎の將呉將軍の頭を得る者有らば、黄金千鎰邑萬家を購し、又た妻わずに少女を以てせんとす。時に帝に畜狗有り、其の毛五采、名は槃瓠と曰う。令を下せし後に、槃瓠 遂に人頭を銜えて闕下に造れり。群臣怪しみて之を診むるに、乃ち呉將軍の首なり。帝 大いに喜びて、計るに槃瓠は之に妻わずに女を以てすべからず、又た封爵の道無し。議るに

報い有らんと欲するも未だ宜しき所を知らず。女一之を聞きて以て、帝皇令を下せり。信に違ふべからずと。因りて行かんことを請う。帝 已むを得ず、乃ち女を以て槃瓠に配す。槃瓠 女を得て、負いて走りて南山に入りて、石室の中に止まる。処する所険絶にして、人跡至らず。是に於いて女 衣裳を解き去りて、僕鑿の結いを為して、独力の衣を著けたり。帝 之を悲思して使を遣りて尋求すれば、輒ち風雨の震晦なるに遇いて、使者進むことを得ず。三年を経て子一十二人を生む。六男六女。槃瓠死せし、因りて自ら相夫妻し、木皮を織績して、染むるに草実を以てす。五色の衣服を好みて、製裁するに皆尾の形有り。其の母 後に歸りて状を以て帝に白し、是に於いて諸子を迎致せしむ。衣裳斑蘭たり、語言侏離たり。山壑に入ること好みて、平曠を楽しまず。帝其の意に順いて、賜うに名山広沢を以てす。其の後滋蔓たり。号して蛮夷と曰う。

犬は蛮夷の父親である——これが「龍犬」の生まれる素地である。もちろん、素地だけでは、犬はやはり犬で「龍犬」にはならない。しかし、北方の龍神文化が南下し、しかも、北方の龍神文化に合致するように南方文化の変化が迫られると、南方の神的存在である犬と北方の神的存在である龍がその力に従って習合し、その結果「龍犬」が誕生した。槃瓠の説話を始め、数多くの「龍犬」説話が出現した背景としては、南方の犬崇拜と

北方の龍神崇拜との習合があったのであろう。

もちろん、北方の龍神文化の南下によって、犬崇拜の地域には「龍犬」だけではなく、「犬龍」——犬頭を持つ龍も生まれたのであった。また、蛇を崇拜した地域には「蛟龍」、ワニやトカゲを崇拜した地域には「鼉龍」、鷹を崇拜した地域には「応龍」が生まれたのであった。

終わりに

以上、六節に分けて龍と鯉、馬、牛、羊、鹿、犬の関係について検討してきたが、それを通して、龍の北方的出自および中国における龍文化の放射的な軌跡を明らかにすることができた。龍はもともと北方に起源する文化的産物である。北方の文化が南下するにつれて、また文化の統一という必要もあって、龍という概念の拡大が行われ、北方的な龍と南方的な龍が生まれた。北方的な龍が鯉、馬、羊、鹿などを基礎にして生まれ、天を志向するものであるのに対して、南方的な龍は大蛇、ワニ、トカゲ、鶏、犬などを基礎にして生まれ、大地を志向するものである。そして最後に、北方的な龍と南方的な龍がもう一度統合して、今日のような龍に変わったのであろう。

中国の学者・王東氏は干支で龍年に当たる二〇〇〇年一月に、『中国龍の新発見』（北京大学出版社）という時宜を得た著作を出版した。そして、その第二篇第三章第八節で、「六大区域、九

種原龍」という新説を提出している。

中華文明起源期の発源地は昔に言われた黄河流域や中原地帯ではない。「黄河—長江」という中国特有の両河流域には、東西南北にわたって六大文化区域が存在していた。

もしこれを広い歴史的背景にしてみれば、中国龍の起源と中華文明の起源はだいたい同時期であり、同時に発生し、同時に発展したものであるといえる。この六大文化区域には、相前後して九種の原龍が現れていた。

- (一) 北方紅山文化：内蒙古馬型原龍と遼河流域豚型原龍
 - (二) 西北仰韶文化、馬家文窯文化 魚型原龍と山椒魚型原龍
 - (三) 中原仰韶—龍山文化：仰韶文化中の山椒魚型原龍と陶寺文化中の蛇型原龍
 - (四) 山東大汶口文化—龍山文化：鷹型原龍と虎型原龍
 - (五) 東南河姆渡文化—良渚文化：鷹型原龍と虎型原龍
 - (六) 中人大溪文化—屈家嶺文化：鹿型原龍と豚型原龍
- (中略)

二十世紀の考古学的発見を見るだけでも、中華文明の起源期間には、六大文化区域には十二種の原龍形態が存在していた。重複の三種を除いても、まだ九種もの原龍があるのである。

王東氏のこの同時発生の原龍説は「二十世紀の考古学的発見」

に基づいており、確かな根拠があるものといえよう。しかし、この説は各文化区域の間の最大で二千年近くの時間差を無視しているし、中国文化の「南北対立構造」も考慮に入れていない。もちろん、私も中国文明は黄河流域や中原流域に起源するとは考えていない。各地域には、もともとそれなりの文化が存在していた。しかしかといって、各地域の文化が接触しないかぎり、形態的には総合性を持つ龍は決して生まれえない。実際、中国文化の「南北対立構造」はまさに各地域の文化の衝突と融合を物語っている。中国大陸では、草原・遼河文化—黄河・中原文化—長江・山岳文化という文化上の南下現象が見られるが、この南下過程においてこそ、形態的には総合性を持つ龍が誕生したのであろう。もしさらに北方文化の南方への移動という移動性を重視して追究すれば、龍の中枢となっているのは、北方文化の神髄であり、移動性も抜群の馬にちがいないと結論づけられるのである。

付記

本論を執筆するにあたり、国際日本文化研究センター教授・安田喜憲氏の環境考古学の成果が大変参考となった。ここに記して、謹んで感謝の意を表したい。

《试论龙与鲤、马、牛、羊、鹿、犬的关系》的概要

李 国 栋

本文论述了龙的起源。

一般认为、龙起源于蛇。但是、从中国文化的“南北对立结构”看、龙是北方的文化产物、其原型决不可能是代表南方文化图腾的蛇。

本文认为、龙的原型是马、在文化背景上与同属北方文化的鲤、羊、鹿密切相关。